

目次

ダイヤモンド 5

楽園事件 パラダイス 169

編者解題 371

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」（昭和六一年七月一日内閣告示第一号）にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。ただし意図的な当て字、作者特有の当て字は底本表記のままとした。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

ダイヤモンド

真鍮金具の小函

からりと晴れた六月の午前であつた。碧い大空と、かがやかしい陽光の下に浮き立ったプリマスの街々には、何の屈託もなさそうな人々が、思い思いにぞろぞろと歩いてゐた。

が、ただ一人、ズボンの衣囊かくしに両手を深く突込んで、市役所前の広場をぶらついている男だけは、一向に浮かぬ気な様子であつた。がつしりとした体格からだつきの、日に焦けた顔をして、潮の中を幾度か潜かくつたらしい古ぼけた厚短ビイジャケツを着、負傷けがでもしている人のように、破れた古靴をひきずりひきずり歩いてゆく。そして擦れちがう人毎に、底光まなざしのする冷かな眼光をくれながら、郵便局の前の辺石ガイップまで来ると、路上へ向けて忌々いまいましそうにパツパツと二三度唾を吐きかけた。

市役所の時計が十一時を打つと、彼は足を返してのろのろと郵便局へ入つていった。そして低い声で、ジョン・リンドセー宛の留置郵便は来ないかと局員に訊いた。

その言葉附から察すると、彼はもう幾度となくそう云つて訪ねて来たものであるらしい。元気のない、投げやりの、来てないことは覚悟の前だが、訊くだけは訊いてみようといった風な態度ようすである。が、つと後を振向いた局員は、しと記した棚の中から汚い封筒を引きぬくと、注意深く宛名のところを調べてから、

「差出地はどこです？」と、訊いた。

その瞬間、男の眼は急に生々と輝いてきた。そして既う半分も勘定台の上へ手を出しながら、「ウエスト・ハートルプールから出してると思いますがね」

局員が無雑作に投げ出した手紙を取上げた時、リンドセーの手は微に顫えた。片隅へいって、そそくさと封を切ると、中からは短い文句を認めた半片の用箋が出てきたが、彼はそれには眼もくれず、更に封筒の中を覗き込んだ。するとそこに二つに折った小為替が入っていた。

急いでそれを取り出したリンドセーは、二ソヴレン（二磅）の額面を見るとホツとした面持で勘定台へ行って、ペンを擱んで署名をし、局員の手から金を受取って、再び晴々しい街の中へ出ていった。

彼は時計台を見上げた。と十一時を五分過ぎたばかりだった。

彼は道を左へとって、群集の中を縫いながら、プリマスからデヴォンポートへ通ずる長い通りまで来ると、その居酒屋へ入って強麦酒を一杯ひっかけた。そして硝子戸棚の中の豚饅頭を二つつかみとって、むしゃむしゃと食った。それから二杯三杯と酒の洋盃をかえては、饅頭を肴にゆつくりと飲んだり食ったりした。にこにこしながらその様子を見ていた居酒屋の亭主が、

「旦那、なかなかおいけになりますね」と戯談半分に話しかけると、

「まる一日食わんでいたら、誰だつて腹が空ろうじゃないか」と唸るように云って、「おい、飛び切り上等の——そうだうんときついシガーを一本くれなさいか」

亭主は函ぐるみ差出すと、リンドセーはその中から一本擱んで、一枚の金貨を投げ出した。そして刺銭を仔細に調べてから、衣囊に入れ、シガーに火をつけて、強烈な香りに快い刺戟を感じながら、言葉も云わずにふいと往来へ飛び出した。

街はまだ群集で一杯だった。軍人や、船乗や、水兵などが下卑た口をききながら、ぞろぞろと歩い

ていた。リンドセーはそれらの人々には目もくれず、とうとうデヴォンポートの近くまで来た。

と、突然、彼は足を止めて立ち停った。そして口にした煙草がポタリと足許に落ちたのも気づかず、傍の飾窓をじつと覗き込んだ。そして身体の上半身を屈めながら、そこに飾られたある一つの品物を睨みつけるように見入っていたが、やがてさり気ない風で、煙草を拾い上げて口に啣えた。

再び窓の方を見た時、彼はシガラの煙を大きくパツと吐き出した。肩巾の大きい彼の胸は、異常な衝動と興奮に波打っていたのだ。やや少時の間、眼の色を変えて、窓の中を覗き込んでいた彼は、突然、

「確にそうだ！ 間違いつこない！」と唸るように叫びながら、身体を伸して、額の汗を拭いた。それから二歩三歩後へ退って、更めて商店の外観を見廻した。正面の看板には「アアロン・ジョセフズ」と書いてあった。陳列の品から推して、それがこうした港町で手に入り易い骨董品を商っていることは一目で知れた。窓には油布から始めて、外国の貨幣類までありとあるが、くたが陳列べてあった。しかし、血相を変えて覗き込んでいるリンドセーの眼には、ただ一つの物しか映ってはいなかった。

それは黒味がかつた木材をつかつて、四隅に真鍮の金具の箍をしつかりとはめた小函であった。普通の煙草盆よりもやや大きいくらいであるが、打見たところ相当重量はありそうだった。木材の方は光沢ばかりを見せていたが、金具の方は長い間磨いたこともないらしく鈍色になっていた。右から左から飽かず打眺めていたリンドセーの眼色は次第に鋭くなり、心臓の鼓動は段々とまってきた。その顔には長い間、捜し求めた揚句、遂に絶望と見切をつけたある物を、突然見出した人のようなかがやかしい表情を見せていた。

「うむ、そっくりだ」彼は初めて呟いた。「十年前とそっくりそのままだ！」

後を追う印度人

リンドセーは思い出したように歩きだした。その顔には、最初窓を覗き込んだ時のような驚愕の表情は消えて、不安そうな陰影がさしていた。そしてシガーをくわえたまま、両手は再び衣嚢に突込んで、額に深い皺を刻みながらふらふらと歩いてゆく。

「さて、どうしてあれを取戻すかな。こいつが一仕事だテ……あまり欲しそうな顔を見ると、あの猶太人奴隷ぎつけて高値を吹きかけるにきまつている。何しろ懐との相談だからナ。だが、そんなことはどうでもいい、どうにでもして取り戻すんだ。元来、俺のものなんだ」

彼はつと足を返して、再び店の方へ取って返した。その時の彼は俯目になって、もう通りがかりの人達には眼もくれなかった。従って、向うから来かかった一人の印度人が、彼の姿を見て驚愕と同時に、その口許ににやりと変な笑いを見せたのには、少しも気がつかなかった。

その印度人は瘦形の小柄な男で、色の褪せた薄地の服を着、黒色の頭巾を頭に巻いていた。彼はリンドセーと擦れ違うと、つと振り向いて、その後姿を見送っていたが、直ぐその後をつけて歩き出した。リンドセーは例の店頭まで来ると少時思案していたが、やがて足を早めて往來を横切り、扉を開けて店の中へ入っていった。

新聞を読んでいた主人のAaron・ジョセフズは見すばらしい客の風体を見て、無愛想に向き直つ

た。リンドセーはコツコツと勘定台を叩きながら、

「あすこに小さい函があるね」と出来るだけ平気な風を装うて、「ちよいちよいした物を入れるのに、ああいう函が欲しいと思つていたところだ。大した値段でなきやあ、売つてもらいたいんですがね」と云つた。

アアロン・ジョセフズはいろんなものを雑然と列べた窓をちよつと覗いて、小函をとつて勘定台に置いた。

リンドセーは眼色を変えながら、顫える指頭で黒味がかつた函の蓋をコツコツと叩いてみた。

「なるほどいい細工だ」リンドセーは強て平靜を装いながら、「ちよいちよいしたものをに入れるには、誂え向きだ。いくらですな？」

ジョセフズはコツンと蓋を叩いて見せた。明に空ん洞の音がした。

「そうですな。いくらで買つて下さるんで？ これでなかなか良い木材で、香がありますぜ、それに金具もよく出来てまさあね、有りふれた品じゃありませんよ」

「十シリング出そうよ」リンドセーが云つた。

「御戯談でしょう！」ジョセフズは函を引奪るよう^{ひつたく}に取つて、後の窓へ載けながら、「十シリングとは減相もない。五磅でも御免蒙りたいんで」

「ホウ！ 五磅！ そんな函が？」

「だって細工が違いまさあね！ それ——」彼は函を再び勘定台の上へ持ち出して、「蓋のこの彫刻^{ほり}を御覧なさい、それから木の香と云い、真鍮の金具とい——どうしてこれで立派な美術品なんですよ」

「じゃ、一体いくらってえんだね？」彼はじりじりして来て、言葉までぞんざいになった。

「そうですね、まあ十磅ですね」

「ふーん！」リンドセーは呻くように云って、勘定台の上に寄っかかりながら、厳しい顔をぬつと相手の鼻先へつきつけた。「十磅もいいが、それが売買のならない他人のものだと分つたら、一体どうなるもんかな？」

ジョセフズは目をまろくして、つと函をとり上げた。そして函と相手の顔とを等分に見遣った。その顔は幾分蒼味を帯びていた。

「何ですって？ この函が他人のものだと——以ての外だ。……ふん、出ていってもらおう、お前さんみたいな人に用はないのだ」

「いや、そうはいかん」相手の間諜つくのを見てリンドセーはぐつと横柄に構え込んだ。

「いざとなれや、これで訴訟事件だからな。第一、君にはその函の所有権がないと申出たらどうだ？ つまりそれを売る権利がないというんだ。それから更に元の所有主が出てきたとしたらどうだ。すると、君は泥棒の盗んできた物を店に置いていたことになるんだ。それから——」

「一人で何を吠てるんだ」ジョセフズは言葉を遮りながら、「拙らないことを云わんと、さっさと出てゆくんのだ！」

リンドセーの顔は一層峻しく緊張してきた。彼は古物商の顔をきつと睨まえて、

「宜いとも、出ていってやろう！ その代り、今巡査をつれて来るから待っている」

吐き出すように呶鳴り散すと、そのままぶいと店を出た。町の向う側に立っていた印度人は、彼が何かを捜す風で、きよろきよろと四辺を見廻しているのを見た。その内に、彼は向うの横町の角に巡

查の姿を見附けると、その傍へ行って何事か話しかけた。

「函の内容は何？」

巡査はリンドセーを見下しながら、むずかしい顔をして、頭を豎に振っていたが、不承々々一緒に古物商の店まで来て、二人で中へ入っていった。印度人はさり気ない風で、そこらをぶらつきながら、やはり看視の眼を放さなかつた。

二人が這入っていった時、ジヨセフズはまだ勘定台の傍に、例の小函を手にしたまま立っていたが、警官を見るとぎくとした風で顔色を変えた。

「こういう理由なんです」リンドセーは小函を指しながら警官の方へ向いて、「この店の前まで来て、ふいと飾窓を見ると、あの函があるんです。私は一目でそれが自分のものだと思ったんです——ずっと前に失くしたもので、決して間違いつこないんです。そこで買い取ろうと思って、値段を聞くと、十磅だなんて云うんです。戯談じゃありませんや。私はぐつと癩にさわったので、もう一文も払うものかと腹を決めたんです。——自分のものを自分が持つてゆくのに何も不思議はないんですからね。それが法律というものじゃありませんか？」

巡査は古物商とリンドセーの顔を等分に見較べた。

「それや、元来君のものなら、無論君のものなんだが」巡査が云った。「それについてちゃ証拠というものがあるね」

「そうですとも」ジョセフズが得たりとばかり口を出した。「勝手に店へ飛び込んで来て、店の品を自分のものだなんて云われては、何とも迷惑至極ですよ。何か証拠を見せてもらいましょう」

「証拠なら直ぐにでも見せてやるよ」リンドセーは待ち構えた風で、「しかし、その前に云っておくが、僕はここへ入って来てから、ちよつとその蓋を叩いただけで、内容^{なか}は少しも見はしなかつたね？ そうだろう？」

古物店^{ふるものや}の主人^{うなず}が首肯くと、

「じゃいい。では、その蓋を開けて見たまえ。内側に真鍮の板があつて、それにJ・L、1889と刻つてあるはずだ」

主人は渋々と函の蓋を開けた。

「さあ、どうだ」リンドセーはそれ見ると云わんばかりに、「偽^{うそ}は云わないつもりだ——そこでJ・Lだが、それは此奴^{こいつ}を見てもらえば論はないんだ」

リンドセーは郵便局で受取つた手紙を出して、警官に見せながら、

「これを御覧下さい。論より証拠です。ジョン・リンドセーというのは私^{わが}の名なんで、兄貴から来たのを先刻^{さつき}ウエスト・ハートルプールで受取つたばかりなんです。1888はあの函を手に入れた年なんです。これだけ確な証拠はないと思ひますがね」

「なるほどこうなると、この人のらしいね」巡査はジョセフズに云つた。

「無論、私のですよ」リンドセーは不気嫌な口調で、「私は五年前、ブラマブートラ号に乗つてた時分、それを失くしたんです。それを誰かしら盗んだ奴がここへ売り込んだに違ひないんです」

「私の方でこれを買つたのは、ほんの一年半位前のことで」古物商は怒つたように云つた。「それに

これがその方のものだなんてことまで、私の方では知るはずがないんです。一々品物の来歴など聞いてもらえませんかからね」

「そんな事はどうでも宜いんだ。とにかく、それを渡してもらわんでは、ただでは済まないことになるんだ」リンドセーは急に凄い見暮になつて、「さあ、此方へ渡してもらおう」

ジョセフズは考えた。一体、この男はどうしてそんなにこの函を欲しがらるだろう？ この函には他人に分らない特別の価値でもあるのかしら！——そんなことを考えながら、彼は一層しっかりと函を握んで、嚇しなんかにびくつくものかと腹を決めた。

「いや、そう雑作なく渡すつてわけにはいきません。もし真実にこれがお前さんのなら、正当な方法でその事を証明しなざるがいい。お前さんがどうした方だか、何故そんな云いがかりをなざるか、私の方には全て関係のないことなんですからね」

巡査はリンドセーの顔が嫌に峻しくなつたのを見て、

「君、これはやはり法律上の手続きを踏む方がいいでしょう。強て欲しいというのなら、法律家の許へいつて相談をした上のことにするんですね」と宥める風に言った。

「何ですと！」リンドセーはかつとなつて叫んだ。「自分のものを取返すのに、そんな面倒いことをしなくてはならないんだと？ フン、余計な文句なんか云わんで、温和しく渡しとく方が宜いだらうぜ。でないと——」

「おいおい」警官は事件が自分の権限内へ入つてきたので、調子づいてきた。

「脅喝染みたことを云うんじゃない。いよいよ君のものだと決れば、その引渡を要求する正当な手段というものがあるではないか。この国では法律というものを無視するわけにはゆかんのじゃ」

「そうですとも」ジョセフズは嬉しそうに巡査の顔を見ながら、「立派に証明してもらいませぬではナ。私の方では正当な道を踏んだことでないかと、一切御免なにございますよ」

リンドセーは二人の顔をきつと睨みつけた。

「フン、そんなもんですかね、此方のものでござつてことが、ちゃんと分つてゐるのに、法律に訴えなくちゃ戻してもらえんものですかい。おい、ジョセフズてか、何てか知らないが、その函は俺のもんだ、俺は取返さなくちゃおかねえんだ。一磅で温和しく引取ろうてのに、ご免だなんて、記憶えていろ！」

リンドセーは互に顔を見合して、突立っている二人に捨台白を残しながら、ふいと店を飛び出した。それから町を横切つて、プリマスの方へ真直ぐに歩いていった。が、百碼と行かない内に、耳の後で軽い咳がしたと思うと、誰かの手が軽く彼の肩に触れた。彼はつと後を振返つた。と、例の印度人とパツタリ顔を見合した。

〔著者〕

J・S・フレッチャー

1863年、英国生まれ。中学校卒業後、新聞社の編集助手や〈リーズ・マーキュリー〉紙の編集部員を経て専業作家となる。1935年死去。

〔訳者〕

森下雨村（もりした・うそん）

1890年、高知県生まれ。本名・岩太郎^{いわたろう}。早稲田大学英文科卒。博文館へ入社し、雑誌『新青年』の編集主幹を務める一方、作家や翻訳者としても活躍した。博文館を退社後、高知県佐川町へ戻り、戦後は故郷で過ごした。1965年5月、死去。

〔編者〕

湯浅篤志（ゆあさ・あつし）

1958年、群馬県生まれ。成城大学大学院文学研究科博士前期課程修了。大正、昭和初期の文学研究を中心に活動している。著書に『夢見る趣味の大正時代——作家たちの散文風景』（論創社）、編著に『森下雨村探偵小説選』（論創社、既刊3巻）、共編著に『聞書抄』（博文館新社）など。

パラダイス・ミステリ もりした うそんほんやく
楽園事件 森下雨村翻訳セレクション
——論創海外ミステリ 230

2019年3月20日 初版第1刷印刷

2019年3月30日 初版第1刷発行

著者 J・S・フレッチャー

訳者 森下雨村

編者 湯浅篤志

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1792-7

落丁・乱丁本はお取り替えいたします